

ユニテ

UNITÉ

12



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
《ロラン体験》の持続と展開	山口 三 夫 2
ロマン・ロランに答える (G・ハウプトマン)	南大路 振一 訳 16
ロマン・ロランとミレー	大 橋 哲 夫 24
ユニテの広場	井土真杉・森 満夫 32
友の会だより	37
あとがき	40
研究所図書目録 (5)	(付)



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

自由な魂、しっかりした性格、それこそは今日の世界にもっとも不足しているものである。ありとあらゆるちがった道——教会の死骸のような服従とか、息の根をとめるような祖国の頑迷不寛容、社会主義の人を愚かにするような中央集権主義など——によって、私たちは群居生活に後戻りするのである。人間は地球の熱い産から徐々に脱出した。その幾千年の努力が彼を疲れはてさせたかのようである。彼は、ふたたび泥土のなかに落ちこみ、集団的な魂が人間をひっそらえ、胸がわるくなるような深淵の息に呑みこまれる……さあ、しっかり立ち直りたまえ、人間の週期が終りに達したと信じないものは！ あなたたちを曳きずってゆく歌群から思いきって離れたまえ！ 真に人間である人は、万人のなかでもひとりでありうること、万人のためにひとりと考え——そして、必要な場合には、万人に反対して考えることを学び知るべきである。真摯に考えるということは、たとえそれが万人に反対することであっても、やはり万人のためである。人類を愛する人々が、必要な場合には、人類に抵抗し、反逆するということが人類にとって必要である。あなたたちの良心や、あなたたちの知性を曲げ、人類に媚びへつらうことによって人類に奉仕するのではなく、権力の濫用に対抗して良心と知性の完璧を擁護することによって仕えるのである。けだし良心と知性は人類の声の一つだからである。そしてあなたたちは人類を裏切るのである、もしあなたたちが自己を裏切るならば。

1917年3月

シエールにて

ロマン・ロラン

宮本正清訳『クレランボー』はしがきより

《ロラン体験》の持続と展開 — アフリカは遠いか —

山口三夫

あくまでも、これは一つの場合、一つの軌跡にすぎないことを、はじめにお断わりしておく。考えてみれば、当り前のことではあるが。

＊

ぼくがアフリカのことを勉強しようとしているのを知ると、——（ここ何週間かは「金大中氏を殺させるな！」に精力をさかざるをえないのだが）——げげんな顔をする人が多い。これにも、二、三にとどまらないタイプがあるようだ。

フランス文学の「専門家」——（この語については、あとで触れる）——が何をいまさら……といった顔もある。これにも新しがり屋と見る向きもあるが、てんでその意味がわからないといった、いまだにヨーロッパ金科玉条（無意識なまでに）的な反応のほうが多いと思う。

また、フランス文学の「研究」もロクにやらないで、何がアフリカか……、あるいは、フランス文学で成果をあげられないから、未開拓の分野へか……といった顔にも出会う。「アフリカにも文学があるのかね？」派は論外としても、ぼくの中心はとくに「文学」ではないから、別に説明もしない。

そうかと思えば、「被差別部落」「冤罪事件」「三里塚」「日韓」……と、身近にいくらでも問題があるのに、「遠い」アフリカをどうしようというのか、というタイプもある。たんなる「野性生活」へのあこがれ（傲慢なロマン主義）に対する批判をもつ、まじめな「活動家」に多いようだ。

その他いろいろあるのだが、最後にひとつ、「日韓癒着」や「アパルトヘイト」に反対を叫びながら、いまだにロマン・ロランというフランス人（日本では戦後民主主義・ヒューマニズムのチャンピオンの一人にかぞえられた、この近代ヨーロッパ人）にこだわりすぎ、マダしっぽが切れていない、と見る人たちもいるようだ。

なるほど、朝鮮語を学ぶことから始めるべきだと考え、それを実践しつつけなが

ら、行動的に事態に対処している人たちがいる。一方また、もはやヨーロッパを經由せず、じかにアフリカに（アジアについても同じことだが）触れ、その匂いを嗅ぎ、そこからアフリカに立向い、かつ日本のことを考えようとする若い人たちが出てきている。

ぼくはこのことを評価する。そして、朝鮮語を学ぼうともせず、いまだアフリカの大地に触れたこともない自分を、中途半端だと思う。（ぼくは、ある意味で、「中途半端」を徹底的に生き抜く決意であるが、この問題はいま別にしよう。）しかし、ぼくは評論家的「タコアシ」を旨としているのではない。そしてまた、「ロランを棄ててアフリカへ！」と向うほど単細胞でもなく、ぼくにおけるロランの位置は、そんな在り方を許すものではないのである。

*

すでに何回か書いたように、敗戦後の暗い青春のなかで、ぼくはロマン・ロランに《出会った》のだった。そのこと自体、あの時代では特別なことではなく、先にも少し触れた観点を含めて、ごく当り前のことであつたろう。しかし、あるとき、ロランはぼくにとって決定的となった。

これを、ぼくはいまだに《救われた》という語で言うとしても、ぼくの人生の転回点ごとに、いろいろな形で、ロランがぼくを「救い」つづけてくれているからにほかならない。これを、どう説明すればいいのだろうか？

ぼくは「説明」が嫌いである。しかし、《救い》などという危険な語を出したかぎり、説明すべきであるのかもしれない。だが、これは「説明」を超えていることだ。だからこそ、あえて《救われた》と言ったのではないか？

そして、そのことの意味をたずねて、ここまで来た。いや、そのことをたずねるためにこそ、ぼくはロランについて書いてきた。本になったのはずいぶんあとのことにしろ、とりわけロランの「離婚」までをたどった『青春のたたかい——ロマン・ロランをめぐる』（1969年、理論社）は、あえて自分の学生時代の文章をも含めて構成したが、ぼくの青春を見なおす作業を通じて、ロラン自身の青春を再構成したかったからにほかならない。

そしていま、ここに含まれているロランの結婚生活10年にまつわる考察は、ぼ

く自身の結婚の直前のことなのであったことを、新妻に捧げる文章のつもりであったことを、思い出さざるをえないのである。この本を、こんな形に構成したのは、ぼくが（いまや、「必要以上に」と言うこともできようが）「研究」を恐れたからであったかもしれない。

これは、ぼくの初めての本『歴史のなかのロマン・ロラン』（1964年、勁草書房）の「序」にも書いておいたことである。ただ、しかし、とりわけ現在の若い「研究者」が頭にちらついたから言うのだが、ぼくがそのときアカデミックな職にいなかったからそう書いた、というのではないということだ。

この本を「研究」仕立てにできなかったわけではない、といったツツランことではなしに、これらの文章は、先の《救われた》という体験に起因する。

ぼくは、ロランがどんな生き方をしたのかを、まず知りたかった。だから、いろいろ本も読んだ。編集者時代は、原稿とりにいって待たされる時間、近くの木陰で、ロランにまつわる自分の考え（のようなもの）を宛名のない手紙の形で書きつづけたりもした。

そんな十年の惑いと感謝の積み重ねが、この本の源泉なのであり、したがって「研究」的指向はなかった。最終的にこんな形——いわば客観的叙述——になったのは、青春の闊雲な主観性を排除しようと努めてきた結果であるとともに、何度目かの失業中の1960～61年、秋から春にかけての体験にも関係する。

一方、ジャン・エルベール氏の神道研究を手伝って、全国の神社回りをした時期でもあるが、フランスでも『内面の旅路』新版が出、日本語第2次全集でも『回想記』とともにその訳が出た直後である。この本を一語一句ゆるがせにせず読み進めることによって、これまでもやもやとして謎のごとくであった何ものかが、照らし出されるのを見たのである。

この何ものかを一語で言うのはむずかしく、また言ってしまっただけでは間違えの恐れがある。ロランの例の「二重の生活」に関することであるが、たんに彼の「芸術」原理と「政治」原理の人間のユニテ、などと書いてしまっただけでは、こぼれ落ちるものの方が多いためである。

ともあれ、これで十年の一つの決算ができたように思ったぼくは、3年間の奈良

での生活に終止符を打って、再び上京したのであった。片山先生はすでに病床にあり、ついにこの本を読んでいただくことはできなかった。出版社が見つかったのはそれから3年後のことでしかなかったのである。

しかし、まだこのとき、ほんとうに「歴史」も《政治》もわかっていなかったことを、ぼくはいま確認する。ぼくの《社会的視覚》は暗いままであった。

*

ぼくの社会的視覚は暗かった。もとより、「軍国少年」にとって何よりも《個》の再建——というより初めての建設だが——が重要であったことは、同情こめて理解できないわけではない。しかし、社会・政治的視覚は、现实生活のなかで体を動かし行動的に対処することによってしか、開かれるものではないのである。（「活動家」的に、ということではない！）

「60年安保」は、奈良で「失業中」のことであり——（京都は河原町での「決定的な日」の体験もあるのだが）——その前、すでに1951年、サンフランシスコ講和条約（いわゆる「単独講和」）をめぐって、ロランの令妹マドレーヌ女史が手紙で、日本が「独立」をとりもどしたことをよろこび——「この独立はまだ相対的なものですが」と付記されていた——他国軍隊の「占領」ということについて、ナチス占領下の経験をまじえて書いてこられたとき、「占領」について考えたことがほとんどなかったぼくは、いささか奇異にさえ感じたのであり、このことを告白せざるを得ないのである。

これは、ぼく個人をも含めた日本人の戦後民主主義の《盲点》の一つではなかったか？ 共産党すらが占領軍を「解放軍」として迎えたことから始まった、日本の「民主主義」であった。このことが、のちにぼく個人にも大きく、深く、反省を迫ることになる。簡単に言うておけば、「敗戦」を原点として生きてきたぼくが、「明治百年」に視点を据えなおさざるを得なかった、戦後民主主義の《風化》に関係する。

さらに、もう一つ思い出すのは、あのディエン=ピエン=フー、つまり、1954年、フランスがインドシナから撤退せざるを得なかった、フランス植民地主義敗北後のことである。革命詩人マルセル・マルチネの未亡人ルネ夫人から、このことを

よろこぶ手紙をいただいたのであった。しかしぼくは、たんに、ヨーロッパとりわけフランスの《すばらしさ》を、あらためて感ただけだったような気がする。

だから、それによって眼が開かれたわけではなかった。

アメリカによる新たなヴェトナム侵略の激化が、ようやくぼくの「開眼」であったと言える。とすれば恥ずかしい限りだが、事実だからいたしかたない、もう40歳に近づいていたのだ。そして、いまだに大したことをやったわけではなく、やりえてもないが、ともあれ「体を動かした」ことから、少しは社会が《見え》だしてきた、と言うことができよう。

だから、青少年向きの『ロマン・ロランの生涯』（1967年、理論社）のほうが、前者『歴史のなかのロマン・ロラン』よりいっそう《歴史》がわかっているとすれば、青少年向きという要請以上のもの、つまりぼく自身の進展があり、ついでに言っておけば、青少年向きだからといって、ぼくは《調子》をおとしたりはしなかった。

そして教師になり、いわゆる「大学紛争」が燃えた。ぼくは「紛争」ではなく「闘争」（それも「大学」に限定されない）としてとらえたが、ここで実に多くのことを学び、かつ考えた。したがって、それを荷なつた若者たちのその後を問うより、《問題》自体が生きつづけている限り、ぼくはその問題をかかえて静岡へ来たのである。そして今や「国立大学」で何ができるか、を超えて、再び日本人として何をなすべきか、になっている。

これを、ぼくの《運命》と呼ぶこともできるだろう。

*

ここで、「専門家」の問題に、簡単に触れておこう。

すでに『人間像・その市民的変革』（1970年、理論社）にも書いておいたように、ぼくは「専門家拒否」から出発した、と言わねばならない。「なるのなら人間専門家になろう、などと書いた若さは、別として、当然この態度には弱さも含まれようが、ぼくはいまだに「フランス文学者」でも、「ロラン専門家」でもないつもりだ（フランスに「留学」したこともないぼくである）。世間がどうレッテルを貼ろうと勝手だが、それを志したことはないということである。

とはいえ、自分が書いたものについては、「専門家」としての責任をさえとるつもりであることは、言うまでもないだろう。

11月初めの、第3回「日本アンチ・アパルトヘイト合同合宿」を思い出す。第1、2回は、地理的条件のため、われわれの「静岡アフリカに学ぶ会」がお世話して静岡で行なわれたが、今回は、大阪の「こむらどアフリカ委員会」の肝入りで、京都は桂の奥のお寺で2泊した。

ところで、東京の「アフリカ行動委員会」の推進力であるK氏が、こんな発言をしたのだった。いわゆる「専門家」になってはいけませんが——（「専門家としてやっていくほうが楽ですよ」とも彼は言った）——たとえば「南アと日本企業との関係」については、だれそれが専門家だ、と言えるように各人がなろう、というのである。

こういうことだ。いまや「アフリカ専門家」とみなされ、文章を書いたり翻訳したりしているほうが、それに甘んじているほうが、はるかに楽であろう。なぜなら、専門家はそれで済むのであり、日本企業や外務省へ押しかけたり、南ア白人選手の来たゴルフ場へ出かけたり、合宿したりはしないからである。

この発言を聞きながら、ぼくは自分の「専門家拒否」説を反題するとともに、おれにはまだこの「専門」がないな、と反省していた。というのも、わが「学ぶ会」はフランツ・ファノンを読むことから始まった、と言えるにしろ、もちろん南アの《アパルトヘイト》（人種隔離）の実態を調べつづけているにしろ、そして今年アミルカル・カブラルを読もうとしているにしろ、各人まだこの意味での「専門」を持つにはいたっていないからである。

また、ぼく自身はこの1年、南アの黒人英語紙「ポスト」の購読者として、以前より少しは生活の匂い（に近いもの）を嗅いではいるが、仲間たちに大して情報を提供できたわけでもない。（ロマン・ロランの「インド通信」ひとつを思うだけで、なんという能力のなさよ、と恥じ入るしかないぼくだ。）「ポスト」紙がキッチンと航空便で来るのではなく、約1ヶ月遅れで、2～3日にわたってドサッと届く、といった事情は言い訳とはなりえない。

K氏とぼくが、ピッタリ同じ考え方でないとしても、この場合どうでもよいことである。そしてぼくとしては、K氏がたんなる「教育学者」や「アフリカ専門家」

にとどまっていないうところに、だからシンドイがやり抜こうとする行動力に（その後、金大中氏死刑阻止請願行動のとき、外務省前で出会ったが）、ぼくなり教えと力を汲んできたし、なおも、10歳は若い彼から汲みつつけるだろう。

いや、ぼくのアフリカに関する知識は、野間完二郎氏在世中の「南ア問題懇話会」（のち「アフリカ問題懇話会」）や、その青年部のような形で発足した「アフリカ行動委」の公開セミナーによる耳学問をその骨子とする、とってよいような気もするほどである。

*

ロマン・ロランが、ぼくにとって「研究」対象ではなく、いうなれば生の根源的な力の開示者であったことは、すでに述べた。そればかりか、ヴェトナム反戦をへて、アンチ・アパルトヘイトに多少ともかかわるようになったのも（『ロマン・ロランの生涯』が機縁となり、『差別と反逆の原点——アパルトヘイトの国』（1969年、理論社）執筆中の野間氏と《出会った》ことが、決定的要因だが）、いわゆる《ロラン体験》と別なことではなく、その延長線上のことにすぎない。のみならず、たんに青春期だけではなく、その後の人生の転回点で、たえずロランに《助けられた》のであった。

形而上学的・精神的な面だけのことではない。とって、翻訳を《経済的》側面からしか考えようとしない、エコノミック・アニマル棲息地の精神風土に、ぼくは真向から挑戦することを諦めたりはしない。

たとえば、大学が燃えた直後、『ジャン・クリストフ』を「初版」と「決定版」によって翻訳する機会を得たのは、有難いことであった。あのとき提起されていた諸問題を、より冷静に考えなおす作業と平行したし、この20世紀最初の「大河小説」自体を、まさに「ヨーロッパ近代」が問い直されているときに再読、精読することによって、この作品がいかに当時の「現代」小説であると同時に、いかに永遠の生命力を秘めているかを、あらためて感得したのである。

また、静大へ来て3年あまりたち、「アフリカに学ぶ会」は生まれていかにしろ。慣れが生活を蝕みかけていたころ、ロランとジャン・ゲーノの往復書簡を再読、翻訳することによって、《精神の独立》のために先人たちがいかに「血を流した」か

を肌で感じ、新たな勇気を汲むことができた。

そしてこの一年は、第3次「全集」のために『戦時の日記』の改訳に捧げた。この「全集」をぼくの生涯における最後の機会としてとらえ、とりわけ旧訳の改訂に義務感を伴う責任を感じて、全力を注いでいるつもりである。もとより、出版社との関係のためではなく、ぼく自身の在り方にかかわることだ。

したがって、9月のように、連日の「金大中氏ら救出緊急行動」のときなど、この『戦時の日記』に時間をさくのがやっとなら、南ア「ポスト」紙もロクに読めなかった非力と怠慢は、認めるのほかはない。しかしまた、この仕事になかったとすれば、くたびれる毎日であったから、酒で疲れをいやすだけで終わっていたかもしれないのである。

それよりさらに重要なことだが、20数年ぶりに通して2回、1800余ページを読み進めることによって、さまざまなことを教えられた。1914～19年のこの記録に収められている、人間獣の行動様式、人間のさまざまなタイプや反応、学者・思想家・政治家の墮落ぶり、それでも絶望することを許さない《独立者》たちの闘い、等々が、時代や国境を超えて、いかに同一であることか！ 街頭で、無表情な市民の顔にやりきれないものを感じて帰り、ロランの記録、省察に促されて、また明日を生きる力を汲むのだった。

一般に、人はある作品を読むとき、その時代のなかでしか読まないのではないだろうか？ 再読、三読してみる必要がある、また、時代を超えて生きられる作品のみが、人間にとっての作品であろう。

『クレランボー』を例にとろう。敗戦後の日本の「平和」主義、民主主義、人間主義の時代には、ごくあっさり、すんなりと「反戦小説」として読まれたかもしれない。なるほど感激はしただろう。しかし、それきりだったのではないか？

たしかに、この作品は、「戦争」を契機とする「思想小説」ないし「哲学小説」としてとらえることができる。しかし、再読して驚くことは、この作品の「芸術」的豊かさである。ロランがすでにこの作品において（とくにフィナーレ部分を見よ）、ガンジーの《不服従》（フランス語の用語は後年のものと異なるが）原理を確立しているといった意味での「思想」性を否定するのではない。そうではなく、少なく

ともぼく個人は、この作品の「芸術」性に気づいてはいなかったと言わねばならない。美しい感銘的な描写や叙述に、なんとしばしば出会うことか！

これを要するに、ロラン愛読者が、ロランは文学性・芸術性が稀薄だという偏見に、知らぬ間に、裏側から、協力してはいないかという自戒である。「文学くそくらえ」の15年をへて文学に回帰しつつあるぼくの、個人的側面にすぎないと、ぼくとしては言うておいてもいいのだが、どうもそうはいかないような気がして、あえて書きとめておく次第だ。

というのも、ガンジーやタゴールがぼくにおいて真の意味をもったのは、ロランを通じてであったことの、日本の意味を問わねばならない、と考えるにつけてきたからでもある。しかし、ぼくの「ヨーロッパ幻想」を打破してくれたいくつかの契機や経験の裏に、つねに「ヨーロッパ人」ロマン・ロランがいた、という事実は否定しようがなく、否定しようとも思わず、ぼくは墓場までこの事実をもって行くだろう。

そうではなく、日本人の側の問題である。いまや、ぼくが本質的に不毛だと考えてきた「世代論」も、加味しなくてはならないとしても……。

*

ぼくのこの35年は、「日本」や「日本人」をめぐって展開してきた、と言えるかもしれない。必要以上にこだわってきた、と見る友人たちも多い。すでに学生時代、片山先生に注意されたこともあった。

しかし、17歳で「敗戦を」(しかも江田島で)迎えたぼくとしては、やむをえなかったばかりか、それしかなかった。

ヨーロッパの文学を読んで教えられ、やがてその受容のあり方、つまりは日本の精神風土への批判的対応を迫られたのも、そのためであった。ロマン・ロランに《救われた》ことの意味を、死ぬまで実践的に問いつづけようと覚悟しているのも、たとえば、戦争中の高村光太郎について考察したのも、この日本で自己を生きつづけるためにすぎなかった。そしてヴェトナム反戦も、アパルトヘイトや「日韓」にまつわって《白い日本人》を告発しつづけようとするのも、それゆえにほかならない。

このとき、アフリカはけっして遠くはないのである。その二つの例を示そう。

人種差別のうちでも極悪非道なアパルトヘイトの南アフリカ、この最後の《白人帝国》で日本人が《名誉白人》の汚名を嬉々として受け容れ、100社を上回る企業が進出して、ポーア系白人のアパルトヘイト体制の補強に強力なテコ入れをしていることを、考えるだけでいい。（あのポーア戦争、正しくは南ア戦争に取材した、ロマン・ロランの現代劇『時は来らん』が「文明」に捧げられていることを、思い出す人もあるだろう。しかし、あのとき、ロランの眼がブラック・アフリカにまで届いていなかったことを、歴史的与件を含めて、確認しておきたい。）

まず、ある商社の社内誌「三井海外ニュース」（1973年3月）から、ヨハネスブルグ支店長署名の『直航便就航でいよいよ近くなった南アフリカ』と題する文章の一節を引こう。

「今日でこそ南アに住む日本人は、“名誉白人”として扱われているが、戦後当地に赴任した先輩は、相当の苦勞をされたようである。しかし、ここ数年来、南アと日本との貿易は飛躍的に伸長し、それに伴ない名誉白人は実質的白人となりつつある。道を走る自動車もトヨタ、日産、マツダなど日本名の車が非常に多く目につく。船も、重機械も、発電機も日本製のものが多く輸入されるようになると、産業、経済の面からアパルトヘイトも次第に姿を変えざるを得ないようになる。」
これが日本人なのだ！ 「実質的白人になりつつある」などと書くことのできる、この感性、この知性！ だから、同じ文章の付表「南アにおける人種別社会的序列」の最下位6には、「バンツー（黒人、ただし4種類ある）」と、平然と書かれる始末である。

その5年後、朝日新聞（1978年6月19日）は「南アと私」というインタビュー記事をのせた。東大法学部出身の34歳、通産省から南ア日本総領事館の領事になった男。新聞は臆面もなく『邦人は「名誉」つき白人』と題していた。

—日本人は名誉白人といわれ、すべて白人並みといわれるが。

「ま、そういうことです。が、名誉という言葉がついている点が白人と違うのですね。日本人と白人がセックスするのは禁じられています。5年前に日本の女性と白人の農場主が結婚したケースがありましてね。政府は交婚禁止法によって夫婦を国外に追放した。ところが、最近、南アに戻ってきて生活が認め

められたのです。」

日本人もいよいよ『名誉』という字が取れて白人になったわけ？

「向こうの政府の人は、これはあくまで例外だから、余り大きな声でいわないでくれ、というのですよ。いうなれば、日本政府の佐世保重工業救済みたいな特例なんです。」

なにしろ、「世界でも有数の快適」な気候のプレトリアに、敷地が4,000㎡、家屋が400㎡くらいで、フロ3カ所、トイレ5カ所、庭にはプールがある「日本円にして13万円くらいの家賃」の家に住んでいた、エリート「名誉」白人である。1967年の《ソウェト蜂起》も、現場にいながら見えなかったらしい。そして、この記事の結論部分はこうである。

「アパルトヘイトは確かにけしからんです。私もそれにくみするつもりはありませんが、泥棒にも三分の理といわれるように、歴史的背景や立場の違いというものがあり、南アには南アなりの主張があるように思います。日本の外交も国連追従主義でなく、日本独自の南ア政策を考える時期じゃあないですか。」

この無知、この傲岸は、彼だけのものであろうか？ あえてコメントはつけないが、それでも、アフリカは遠い、と言っているであろうか？

ただ、彼が用意していたらしい『南ア共和国体験記』350枚が、いまだに本にならないのは、「アフリカ行動委」の若い仲間たちの詰問に、タジロイだためであるらしいことだけを、付け加えておく。

＊

ロマン・ロランが生涯かけて闘いつづけたもののことを、考えよう。彼の《精神の独立》は、何のためであったかを、考え直そう。

人間は、死ぬまで人間になりつづけることによってしか、人間として生きえないのである。のみならず、現在、われわれ日本人の生活を支えているものを見るとき、いたたまれない思いに駆られざるを得ないのである。たえず自分の基盤を突き崩そうと努めることによってしか、人間として生きていくことができない、この日本の現実。この現実がある限り、それに身をもって対処することなしに、「思想」も「文学」もないだろう。

これが、偉大なロマン・ロランから、小さなひとりの日本人が、人間として学んだことであり、学びつづけていることの一側である。微小なるがゆえに、《師》のような、総合性をもちえないとしても、ぼくはけっして[政治]的に偏向しているのではない。また、《ロラン体験》なるものは、各個人によってそれぞれ異なるとしても、その個別性のなかに「普遍性」が、そして「総合性」が秘められている。滲み込んでいる。

もしそうでないのなら、それを《ロラン体験》と呼ぶべきではないだろう。

(1980年12月)

*

[追記]

最近、旧友たちから手紙をもらい、考えるところがあるので、書き加えることにする。その一つは、ロランによって結ばれた、少し若い30年来の友からのもので、——たしかにロランは大きい、しかし、君は君自身を生きたまえ、というもの。もう一つは、ともに「軍国少年」であったころからの友人で、——君は他人にとらわれすぎているようだが、君の『ロマン・ロランの生涯』を読んでいる子供たちのことだけを考えていればよいと思う、というもの。

この文章にまつわっては、さしずめ、この二つが問題になると思う。

まず、後者に関して考えを述べよう。——他人が気になるというのは、たしかにそうで、ぼくの《貧乏症》(それも、都会風ではなく田舎的な)のせいなのだろう。おそらく一生なおるまい。これを、学生時代に、《見栄坊》と名づけた都会育ち(京都の)がいた。たしかに、ぼくには「田舎ざむらい」的な美的倫理観があるのだろうことは、否定はしない。

しかし、子供たちのことだけを考えているにしては、ぼくはベシミストでありすぎるのだろうか? たんに、ぼくたち自身の世代に絶望せざるをえないからだけではなくて、日本の若者にすべてを任す気にはならず(かといって、干渉したりはしない)、自分を絶えず「若僧」と考えながら自己変革をつづけることによってしか日本人の未来はない、(滅びるときは、ともに滅びるつもりであり、若者だけを戦争に追いやったりはしない)と思っているまでのことである。

これを「思い上がり」と考えるほうがオカシイのであって、同世代にも若い人たちにも、ぼくの考えを押しつけるつもりはない。ただ、現在のように考えたり行動したりしなければ、この《弱い》ぼく個人は、人間になれないと思うから、シンドイがやりつけようとするのである。

後者に移れば、相手が少年時代に《ロラン体験》をもち、その持続と展開を願い、10年ほど前にも『ジャン・クリストフ』は彼の「聖書」だ、とあえて口にした人だけに放ってはおけない気がする。ただし、職業はぼくのような《虚業》ではなく、彼は《実業》の世界に属している。

彼がなぜ、それを言ったのか？——直接的には、ぼくが1980年を、校正までも含めて『戦時の日記』に捧げたことを知っているからであろう。それを知っていたとしても、あるいはぼくが、ロランの名を口にしすぎたのかもしれない。しかし、毎日のようにロランに接していて、ロラン愛読者にたまに会ったとき、ロランを口にしないで感想を語ることはむずかしい。それとも、ぼくがこのごろ、自分の文章を書かないことから来る、友人ゆえの期待の裏返しであるのかもしれない。

いずれにせよ、まず、ぼくはロランを楯にとって自己弁護を試みたことはない、と言っておきたい。(忙しさの楯のことなら、いまや、授業や学内委員会、それに、まれではあるが、学生の「自主ゼミ」や相談にのることぐらいしかないとはいえないか？)

そうでなくても、ロランに教えられたことの根本に、お互い、絶えず《自己》を生きよ、がなかったであろうか？ 貧弱であれ、その《自己》を見出すために30年を過ごしたのであり、この日本では、じっとしていれば、確立したかに見えた《自己》すらが崩れ去る危険があるから、シンドイことをやっているのだと言える。

自分の芸術なり、さまざまの職業なりで、その《自己》を生かし、発展させている(あえて「自己満足」とはいわない)人は幸いなるかな！ ぼくは、そんな人たちに苦言を呈したりはしない。それでも、日本人の経済的基盤や精神風土の問題が變るだろう、とは言うておきたい。

ここでは、ロランにこだわるのであるが、ロラン自身の言い方を借りれば、「偉大な」ロランを「卑小な」自分の背丈に合わせようとしたことはなかった、と断言できる。ぼくがロランについて書いたものが、彼の精神の高みへのぼつてもいず、

彼の全体像を描きえていないとしても、それは、ぼくがロランに肉迫した一つの報告にすぎないものだからである。そして問題は「知識」ではない。(だから、「ロランは教室になじまない」などと言ったりもしたのだった。)

それでも、ぼくは口にしすぎるのだろうか？ 知識のことではなく体験が問題となるとすれば、あるいはそうであるかもしれない。

口にしない場合も、たとえば、ことロランにまつわっては、どんな話にもものってしまう。日ごろ批判的な大企業でも、先輩の方がいったん引受けたのち都合が悪くなったような場合、「ピンチ・ヒッター」になることも辞さない。少しは自分なりにと、意地っぱりな工夫をするとしてもである。

これまで耳にしたことのない小出版社の話にも、ロランのことだからというので引受け、シクジルこともある。電話一本で求めに応じ、写真資料まで送ったことがある。3年たっても活字にならないのは構わないが、請求しても写真すら返送されて来ない。これには参った！ ぼくが甘すぎるのだろうか？

50歳を過ぎてこのていたらしく、「専門家拒否」できたのだから、ぼく個人に權威がないのはいいのだが、資料が散佚するのはいかにも惜しいのである。

そんなことなら、教室で若者たちにしゃべっていたほうがいい、という疑問も出よう。その通りだと思う。(「教室」は別として、いわゆる「自主ゼミ」ではロランを読んでいることを、報告しておこう。ぼくのほうからテーマを決めたことがないということと、静大ではこの2年、学生の中心が「哲学科」であるということとともに。)

話を「追記」の冒頭に戻すなら、ぼくがたといロランを「かついで」いるように見えようとも(片山先生が、そんな悪意の批判を受けたことがあった)、ぼくはロマン・ロランでも片山敏彦でもないことは、あまりにも明らかではないか！ (片山さんの「政治」的禁欲を、ぼくは彼の生きた時代のなかで評価している。しかし、ぼくたちの時代は、現在のところ、そうであってはならないと考えている。)

ともあれ、ロマン・ロランがぼくのなかにおいて、ぼくを支えてくれているという実感は、とりわけ今日このごろ強いのである。

ぼくの《弱さ》より、日本社会の趨勢がそうしてはいないか？

ロマン・ロランに答える

ゲルハルト・ハウプトマン

ロマン・ロラン、あなたはわたし宛てに公開状を出された。そこには（ロシア、イギリス、フランスによって強いられた）この戦争についての心痛——ヨーロッパ文化がさらされている危険、古き芸術が生んだ聖なる記念物の破滅についての心痛が滲^セんでいる。世人のこの心痛はわたしも共にする。しかし、あなたが頭の中ですでにわたしに書かせようと考えた返事、ヨーロッパのすべての人間が期待しているとあなたが不当にも主張する返事を書くことは承諾できない。

わたしはあなたがドイツの血筋であることを知っている。あなたの見事な『ジャン・クリストフ』はわれわれドイツ人の間で、『ヴィルヘルム・マイスター』および『緑のハインリヒ』¹⁾と共にいつまでも生きつづけるだろう。フランスはあなたがのちに選んだ祖国だ。だから今あなたの心は引き裂かれざるをえない。これまであなたはこの二つの民族の和解のために熱心に働いた。それにも拘らずあなたは、血みどろの亀裂が——多くの構想と共に——あなたの美しい平和の構想をも無にしてしまった今、われわれの国と民族とをフランス人の目でながめている。この目をドイツ人の目、はっきり見える目にする努力はいずれも徒労に終わるだろう。それはまったく確実なことだ。

あなたがわれわれの政府、われわれの軍隊、われわれの民族について言うことは、むろん、すべて見当ちがいであり、すべて根底から誤っている。あまりにも誤っているため、この点では、あなたの公開状はわたしには一つの無地の真黒い面のように思える。

戦争は戦争だ。あなたが戦争について嘆くのはよい。しかしこの始源的な出来事とは不可分の事柄について驚くのは別だ。もとより戦場の混乱のうちに掛け替えないルーベンスが破壊されるのは困ったことだ。しかしわたしはといえば——ルーベンスには失礼ながら——兄弟であるひとりの人間の撃ち抜かれた胸にたいし、はるかに深い苦痛をおぼえる者である。そしてロラン、あなたの同胞であるフランス人がシュロの枝²⁾をかざしてわれわれに向かって来るような口振りは許されない。じっさい彼らは大砲と散弾で、いやそればかりかダムダム弾で十分に装備されているのだ。

たしかにあなたにとって、われわれの勇猛な軍隊が恐ろしくなったのだ！ このことは、その大義名分によって不敗を誇る軍隊には榮譽となる。しかしドイツ兵士は、あなたのフランスの嘘つき新聞が躍起になって揚げようとしている、あの厭わしい馬鹿げた残酷物語とはいささかの関係もない。この嘘つき新聞にこそフランス民族とベルギー民族の不幸の原因があるのだ。

ひとりの無為のイギリス人がわれわれを「フン族」と呼ぶのはよい。あなたがわれわれの素晴らしい国防軍の戦士たちを「アッティラの息子たち」と呼ぶのもよい。われわれにとっては、この国防軍が無慈悲なわれわれの敵たちの輪を粉碎してくれば十分だ。あなたはわれわれのドイツの名前が葬られた墓の上に、ゲーテのいとしい孫たちに捧げると称して、感傷的な碑文を置くよりは、われわれをアッティラの息子と呼び、われわれの頭上に三たび十字を切り、われわれの国境のかあなたに居るほうがずっとよい。「フン族」という語は、みずからフン族である連中によって造られた。つまり、健全で有能この上ない一民族の生命を狙う犯罪的な企みに失敗した連中によって造られた。この民族は恐ろしい一撃にたいして、もっと恐ろしい受け止め方のあることを示してみせたのである。そして無力へと追いつめられた者は他人にたいする罵倒へと走るものだ。

わたしはベルギーの民族を非難することはしない。ドイツ軍の平穏な通過（それはドイツにとって死活問題だった）は、ベルギーの政府がイギリスとフランスの¹⁾かいらいとなったために承認されなかった。この同じ政府はその後、最前哨を支援するために類をみないゲリラ戦を組織し、それによって戦争遂行の——ロラン、あな

たは音楽家だ！——恐ろしい調子を決定した。もしあなたが、ドイツを傷つけるための嘘言の巨大な壁をくぐり抜ける可能性を得たいと思うなら、9月7日付けで帝国宰相がアメリカに送った報告を、そしてさらに9月8日、皇帝みずからウィルソン大統領に打った電報を読まれるがよい。あなたはルーヴアン³⁾の不幸³⁾を理解するのに知っておかなくてはならない事柄をそこで教えられるだろう。

訳 注

- 1) スイスの文豪ゴットフリート・ケラー(1819-90)の代表作。いわゆる「教養小説」の系譜に属する。
- 2) シュロの枝は平和を象徴する。
- 3) ベルギーの古都ルーヴアンの破壊については、ロランは「公開状」のほかにも『戦いを超えて』の中で何回か触れている。

嘘言を駁す

われわれはすぐれて平和的な民族である。パリの浅薄な^{フィニスト}雑文家ベルグソンにはわれわれを「蛮族」と呼ばせておこう¹⁾。偉大な詩人かつ盲目的なフランス心酔者メーテルリンク²⁾がこの「蛮族」に類するような肩書をわれわれに付けるのもよいだろう——以前には彼はわれわれを「ヨーロッパの良心」と呼んだのであるが、世界はわれわれが古い文化民族であることを知っている。

「世界市民」の理念がドイツほど深く根を下ろした国はない。われわれの翻訳文化をよく見たうえて、ドイツ民族ほど異民族の精神と特質を正しく評価し、その魂を愛情こめて深く理解しようと努める民族をほかに挙げてみるがよい。メーテルリンクもわれわれの国で名声と富とを獲得したのである。もちろんベルグソンのようなサロン用の^{ドクトリン}哲学者にとっては、カントやショーペンハウアーの国で占めるべき場はない。

はっきり言っておこう——われわれはフランスにたいし憎しみをもたないし、またもったこともない、と。この国の美術——彫刻と絵画、この国の文学をわれわれは礼賛してきた。ロダンにたいする世界的評価はまずドイツで培われた。われわれはアナトール・フランスを尊敬する。モーパッサン、フローベール、バルザックはわが国ではドイツの文学者と変わらぬ影響力をもっている。われわれは南フランス〔プロヴァンス〕の民族性に深い愛着をおぼえる。ミストラル³⁾の熱烈な崇拜者はドイツの小都市にも、露地にも、屋根裏部屋にも見出される。ドイツとフランスが政治的には友人でありえなかったのは痛恨の極みである。両国はそうでなければならなかったのだ——ヨーロッパ大陸の精神財を管理する者であり、ヨーロッパの精髓をなす二つの偉大な文化民族であるからには。ただ運命はそれを欲しなかった。

1971年にドイツの諸侯はドイツ統一とドイツ帝国を克ちとった。この成功によりドイツ民族には40年以上の平和な時期が恵まれることになった。それは比類のない、発芽・生長・成熟・開花・結実の時代である。人口がますます増加する中でますます多くの個人が形成された。そして個人の実行力と国民全体の活力はわが国の工業、商業、交通の偉大な成果を生むにいたった。わたしは思わない——アメリカの、イギリスの、フランスの、或はイタリアの旅行者がドイツの家庭で、ドイツの都市で、ドイツのホテルで、ドイツの船で、ドイツの音楽会で、ドイツの劇場で、パイロイトで、ドイツの図書館で、ドイツの美術館で蛮族の間にいるような気がしたとは。われわれは他の国々を訪れ、他の国々のすべての客に門戸を開いておいた。

たしかに、われわれの地理的位置——東から西から脅かす強国は、われわれに国家の安全について配慮することを余儀なくさせた。こうしてわが国の軍隊が編成され、艦船が建造された。この形成作業にはドイツ民族のすぐれた労働能力と発明の才がおびただしく投入された。それが絶対に必要であったことをわれわれは今、かつて知っていたより——そうよく知っている。しかし皇帝ウィルヘルム二世、帝国大元帥はいとも誠実に平和を愛し、平和を保ってきた。われわれの統制ある軍隊は防衛のためにのみ役立つはずであった。われわれは危険なもろもろの攻撃にたいして武装を望んだのである。くり返していうが、ドイツ民族、ドイツ諸侯、その首長ウィルヘルム二世は、陸海軍によって帝国という密房——そこでの勤勉で多様な

平和のいとなみを確保すること以外に何の考えももたなかった。わたしの深い確信を次のように表現しても不遜にはならない。すなわち、祝福された治世をあくまで平和な治世として閉じることこそ、皇帝がいだきつづけた念願であった、と。事がそうならなかった責任は、彼にあるのではなく、われわれにあるのではない。

われわれが遂行している戦争、われわれに押しつけられた戦争は防衛のための戦争である。これを否定しようとする者は無理をせざるをえないだろう。東部の、北部の、西部の国境の敵をみるがよい。オーストリアとわれわれの同族的な友好関係は兩國にとって自己保存を意味する。われわれが武器を執ることを余儀なくされた次第——それは、眩惑ではなく洞察を重んじる者なら誰しも、わが皇帝とロシア皇帝との、またイギリス国王との間に交わされた電報から読み取るがよい。——もとより、ひとたび武器を執ったからには、われわれの聖なる権利を神と人間の前に証しするまでは、われわれが武器を置くことはない。

しかしこの戦争を企らんだのは誰なのか？ その上、蒙古人——これら日本人までもけしかけて、われわれの種を悩むような卑劣な真似をさせたのは誰なのか？⁴⁾ いずれにせよそれは、コザック騎兵の群れに取りまかれていながら、ヨーロッパ文化のために戦うと称する、われわれの敵たちだ。わたしにとっては、「イギリス」という語を口にするのは苦痛というほかない。わたしはイギリスの大学オクスフォードから名誉博士の学位を授与された野蛮人のひとりである。イギリスには、わたしの友人で片足をドイツの精神的領土に据えている者がいくらもいる。イギリスのかつての陸軍大臣ホールデン⁵⁾は、そして彼と共に無数のイギリス人は、あの小さな野蛮な町ワイマール——野蛮人ゲーテ、シラー、ヘルダー、ヴィーラントたちが世界の人道主義のために活動したあのワイマールに定期的に詣でたのだ。その戯曲が——他のいかなるドイツ詩人の戯曲にもまして——わが国民の共有財となったドイツ詩人がいる。その名はシェイクスピア⁶⁾。しかしこのシェイクスピアは同時にイギリスの詩人たちの頭である。われわれの皇帝の母后はイギリス人であるし、イギリス国王の妃はドイツ人である。しかし種族的に、資質的にわれわれに近いこの国民がわれわれに宣戦布告を届けてきた。なぜか？ それは神のみぞ知ることである。ただ確かに言えるのは、世界を舞台にして開かれた目下の血なまぐさい演奏会では、

イギリスの或る政治家が興業主であり、指揮者であることだ。もとより、この恐ろしい音楽のフィナーレでなおも同じ指揮者がタクトを振っているかどうかは疑わしい。「従兄弟よ、お前の手先どもが恐ろしい松明をわれわれの小屋に投げ込んだ時、お前の考えたことはお前自身にとっても、われわれにとっても禍いだった。」

わたしがこの言葉を書いているうちに日食の日がすんだ。わが軍はメッツとフォゲゼン山脈の間で八つのフランス軍団を撃破した。彼らは潰走している。ドイツ人として国内に暮している者は感じた——こうなるべきだった、こうならざるをえなかった、と。われわれの胸は鉄の輪で締めつけられたのだ。われわれには分かっていた——この胸は脹らんでその鉄の輪を砕くか、それとも呼吸するのを止めなければならなかった。しかしドイツは呼吸するのを止めない。それで鉄の輪が砕け散った。

もし神の意志によって、われわれがこの非常な試練のつぼから新たな存在となって現われるなら、われわれはこの新生にふさわしくあるという聖なる責務を果たさねばならないだろう。ドイツの軍事力の全面勝利によってヨーロッパの自主性は確保されるだろう。大切なのはヨーロッパ大陸の諸民族に理解させることだ——この世界大戦が彼らの間では最後のものにならねばならぬということ。いまや彼らは悟らねばならない——彼らの血なまぐさい決闘から恥ずべき利益を得るのは、みずから戦うことなく、この決闘を企らむ者だけであることを。そしてヨーロッパ大陸の諸民族は、相互の誤解をもはや不可能にするような、文化に徹した、平和の共同作業に専念しなければならない。この点では戦前にもすでに多くのことがなされた。諸国民は平和的な競技に集まった。そしていつかはベルリンでのオリンピック競技に集まるのだ。わたしは今でも飛行機の、自動車の、人間の競争を思い起こす。芸術面と経済面での国際的な活動を、偉大な国際的な賞の設定を思い起こす。蛮族の国ドイツは、人も知るとおり、社会福祉の大規模な制度という点では他民族に先んじた。勝利の暁には、われわれの義務として、この道をあくまでも前進し、このような福祉の恩恵を他民族にも広めなければならないだろう。さらにわれわれの勝利は、ゲルマン諸民族にたいし、彼らの存続が世界の祝福になることを保証するだろう。この数十年間には、かつてなく、たとえばスカンジナビアの精神生活がド

イツのそれに、逆にドイツの精神生活がスカンジナビアのそれに有益な効果をもたらした。この期間にどれほど多くのスウェーデン人、ノルウェー人、デンマーク人が、いささかの血の相違も感じることなく、ストックホルム、クリスティアニア、コペンハーゲン、ミュンヘン、ウィーン、ベルリンでドイツ人の兄弟たちと握手したことだろう。いまではイブセン、ビョルンソン、ストリンドベルク〔ストリンドベリー〕といった偉大で高貴な名前に限らず、なおどれほど多くの名前がわれわれに同郷の親しみをはっきり感じさせることか。

聞くところによれば、外国ではわれわれの名誉、文化、能力を中傷するおとぎ話がおびただしく造られているという。これらおとぎ話を造る者たちは、いまの激烈な時代がおとぎ話の詩人には不向きであることを考えてみるがよい。血によってこのことを証^かする者たちが三方の国境にいる。わたし自身、息子をふたり送り出した。恐れを知らぬこれらドイツの戦士は、何のために出征したかを十分に心得ている。そこには文盲の者はひとりとしていないだろう。それだけ—そう多くの者は、銃を握っているほかに、背のうの中にはゲーテの『ファウスト』を、『ツアラトゥストラ』を、ショーペンハウアーの著作を、聖書もしくはホメロスを入れている。そして背のうに書物を入れていない者もまた知っている—すべての客人に安全な場を与えるかま^どのために自分たちが戦⁸⁾っていることを。今日でもドイツでは、フランス人、イギリス人、或はロシア人にはいささかの危害も加えられていない。ましてや、感傷的なメーテルリンク氏の国で無抵抗な犠牲者たち、そこに定住した素朴なドイツ市民とその妻たちに行なわれているような、いとも無残な、呪うべき、無用の、残忍な暗殺が行なわれることはない。わたしはメーテルリンク氏にとくに保証しておこう—文化国民のこのような所業をみて、これを真似る気など起こす者はドイツにはひとりとしていないことを。われわれは今後ともむしろドイツの蛮族でありたいし、そうあるだろう。われわれドイツの蛮族にとっては、信頼の念をもってわれわれの^{もてなし}を享受している敵国の婦女子は神聖なのだ。わたしは彼に保証してよい—フランス語をしゃべるベルギー人たちがいま見せている「すぐれた礼節」を十二分に顧慮するにしても、ベルギーの婦女子をドイツにおいて卑怯にも拷問にかけて殺害することには、けっしてわれわれは同意しないことを。すでに述

べたとおり、国境には血をもってこのことを証しする同胞がいる——社会主義者とブルジョワ、農民と学者、公子と労働者が相ならんで。彼らはドイツの自由、ドイツの家庭生活、ドイツの芸術、ドイツの学問、ドイツの進歩のために戦っている。全き明瞭な意識をもって、国民の高貴でゆたかな財産のために——精神的な、そしてまた物質的な財貨のために戦っている。全人類の進歩と上昇に役立つ財貨のために。

訳 注

- 1) 1914年8月8日、ベルグソンはパリのアカデミー会長として、ドイツを非難する講演を行なった。9月15日に発表されたロランの論文「戦いを超えて」をも参照。
- 2) Maurice Maeterlink (1862-1949)。わが国では『青い鳥』で知られている、ベルギー出身の作家。
- 3) Frédéric Mistral (1830-1914)。プロヴァンスに生まれ、プロヴァンスで活動した詩人。中世この地方に栄えた言語と詩の復興に尽くし、この地方の民族意識の高揚に努めた。
- 4) 日本はイギリスの同盟国として8月23日に参戦した。
- 5) Richard Burdon Haldane (1856-1928)。イギリスの自由主義的な政治家。1905年から12年まで陸軍大臣。ドイツ文化のよき理解者として知られ、ドイツとイギリスの建艦競争の調停にあたったが失敗。
- 6) 17世紀いらいドイツにおけるシェイクスピア受容の歴史は長く、ことにロマン派のシュレーゲル兄弟による訳業によって、シェイクスピアは一般にドイツの詩人として意識されている。
- 7) ベルリンでのオリンピック競技が実現したのは、1936年、ヒットラー政権の下である。
- 8) ローマ人にとっては、祭壇(ara)とかまど(focus)は、それぞれ寺院と家庭の神聖性を象徴するものであった。ここから「祭壇とかまどのために(pro

aris et focis) 戦う」という表現が生まれた。ロラン自身、同年10月に
"Pro aris" と題する一文を草している。(論文集『戦いを超えて』に所収)。

訳者あとがき

1914年8月はじめに始まった大戦は、たちまちヨーロッパ大陸からアジアにまで広がった。当時スイスにいたロランは、同月29日、ゲルハルト・ハウプトマンに宛てた書簡をジュネーヴの新聞紙上に発表する(論文集『戦いを超えて』に所収)。劇作家ハウプトマン(1862-1946)は当時ドイツを代表する知識人であるばかりでなく、ロランと時代を同じくする、ヨーロッパ文化の「もっとも優秀なチャンピオンのひとり」であった。このロランの公開状にたいするハウプトマンの回答——それが9月10日、ベルリンのフォス紙(Vossische Zeitung)に掲載された「ロマン・ロラン氏に答える」(Antwort an Herrn Romain Rolland)である。なおハウプトマンはこの公開状を受ける直前、8月26日付けのベルリン日報(Berliner Tageblatt)にやや長い「嘘言を駁す」(Gegen die Unwahrheit)と題する一文を発表しているので、ふたりの立場の比較のために併せてここに訳出した。テキストはいずれもプロビューレン版の「全集」第Ⅺ巻(1974)に収録されたものによる。

南大路 振 一

ロマン・ロランとミレー

大橋 哲夫

序

美をいつくしむ心は、人間存在を成り立たしむる深いところから生まれ出ている。

芸術とは人間にとって何なのか、という問いが發せられるとき、それは人間生活に不可欠な一部分なのであると答えねばならないだろう。われわれの肉体が日々の糧を必要とするごとく、魂は芸術の糧を必要とする。それがなければ人間は人間でなくなるだろう。眞の芸術家とは、はっきりとこのことを確信し、魂の糧のために労した人である。芸術は、したがって、単なる手すさびごとや気晴らしではない。かつてリルケが若き詩人への手紙に書いたように、書かずにいられない根拠、もしも書くことを止められたら、死ななければならないようなそういう深い衝動がこめられていなければならない。ミレー自身が書いている。「美をつくりだすものは、描かれた物そのものよりも、それを描かずにいられなかったという気持のほうが大切です。その気持の程度によって、仕事にこめられた力の程度が生ずるのです。」おそるべき貧窮の中に、長い間報いられることもなく、ただ大地の上に生活する農夫たちを描き続けたミレー。外見的には、ひよつとしたら、当時の批評家の1人が悪罵したように、粗野で、単調で、平凡で、陰気だったかもしれない。しかし、その内面を見るとき、なんと豊かな、なんと純粋な、なんと驚くべき荘重さを持ってわれわれに迫ることであろうか。なによりもその芸術に対する確たる態度——それは人生に対する確たる態度であったのだが——をわれわれは賛嘆するのである。それは、まさに心情において独自の偉人、ロマン・ロランが烈しい共感をもって賛える偉人の特質なのである。

1. 芸術それは闘いである

「人生は闘いである」とロマン・ロランはくりかえし叫んでいる。これは「ジャン・クリストフ」の大きなテーマでもある。日々に労苦し、傷つきながらも、たえず闘い、たえずやり直し、前進していくこと、これが人生であり、生きるに価値ある生涯なのである。ミレーにとっても、人生はそういうものであった。言語に絶する貧困と不遇の中であって、ロランが書いているように、苦しみこそは彼にとってみずからのすぐれて恵み深い「運命」であったのである。神は言われた「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたはひたいに

汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る。」（創世記3章17～19）。ミレー自身も1854年にこう書いている「私の綱領は労働です。何人も肉体上の刑罰を受けねばならぬように運命づけられています。『ひたいに汗して汝のパンを食べよ』とは大昔に書かれています。これは決して変ることのない不動の運命です。」と。ミレーはみずからの運命をのろうことはなかった。彼は、宗教の最も美しい精神をもって、キリスト教の聖人たちのように、むしろ喜んで人生の苦しみを抱いたのである、みずからのすぐれて恵み深い運命として。神は人間を貧しい者としてつくられた。人間が苦しんで働くためである。しかし、このことの中に何と豊かな恩寵がこめられていることであろうか。働く者は人生に退屈することはない。それ故に貧しい人たちはしあわせである。望ましい唯一の富、それは仕事である。仕事によってこそ、恵まれたどんな小さな才能でも実らせることができるからである。ミレーが画を描くことは、こういう意味での彼の仕事であった。だから彼の芸術は、そのまま彼の生活そのものであったのである。芸術と人生は、ミレーにあっては矛盾するものではなく一体のものであった。したがって、ミレーが「芸術は闘いだ。——芸術においては、そこに自分の生命をかけなければならない」と言うとき、その意味はロマン・ロランが言うところの「人生は闘いである」という言葉と同じ意味を持っていたのである。ロランの闘いをわれわれはよく知っている。その虚弱な体質、とくに幼少からひどかったぜんそくのために、「いつまで生きられるだろうか」という不安との絶えざる闘い、不幸な結婚とその破綻の中での闘い、パリ文学界での孤独な闘い、そして、ヨーロッパが第一次世界大戦に突入した時、圧倒的熱狂に抗して、まさに万人に対する1人の闘いを闘わなければならなかったロラン。彼なればこそ、深くミレーを理解することができたのである。

2. 美は適合である

ミレーは言う「なんでもそれが正しい時と場所とを得ていれば美しいし、それと反対に場所を誤ったものは美しくはなれない、と言うことができるだろう。まっすぐな木とねじれた木とはどちらが美しいか。それはそれぞれの場所に適合しているほうが美しいのである。美しいものは適合しているものである。——言葉を換えて

言えば、正しい場所を占めていて、その語ろうとしていることをよく語っているものなのである」と。明らかにこの言葉は、ロランが書いているように、造形美について言っている言葉ではない。ミレーが自分の追求する美の中心に考えたものは、存在のあるべき姿、生を享けてこの地上に置かれた人間や動物や樹々のあるべき姿——写生ということの本質はこの姿をとらえることにあると私は思う——であったのである。夕陽の残光に色どられた野原で羊の群を背景にして、頭を垂れ、もの思いにふけりながらたたずむ羊飼いの少女は、こよなく美しい。耕作に疲れて、ふと手を休め鋤にもたれかかかって立っている1人の農夫は、その後に続く無限のような地平線をバックに動かしがたい美を持っている。描かれる対象は何でもよい。正しい場所を占めて——羊飼いは羊の野に、耕やす人、種まく人は畑に、そしてその語ろうとしていることをよく語っているもの——落穂をひろい、あるいは夕べの鐘に祈り、川辺でアヒルを追う、そこに美があるのである。ミレーは、自然を描くのに、自然をそのまま写生して画面に移すということではしなかった。簡単なスケッチや自分が見てきた印象をもとにして、画室で再構成したのである。しかもそうしたほうが自然から直接描いた画よりも忠実であるというはっきりした信念を持っていたのである。この方法は、風景や人物の単純化、構図の堅固さ、見る者にうったえかける力強さを結果としてもたらす。画家の頭の中で再構成された自然は、画家の美意識に濾過されることによって、調和をもって構成された自然、「美」の自然として画面に姿をあらわす。そして、その描かれた自然は、ある意味において現実にある自然よりも、より真実であり、より本質をあらわしているということができるのである。ミレーにとって、美は人間生活を離れたどこか遠いところに存在するのではなく、ごくありふれた身のまわりに、どこにでも、ただ画家が真正な眼をもって見つめさえすれば存在するのである。目ある者は見よ、聞く耳ある者は聞け。これは、ロランの音楽に対する考え方となんと類似していることであろうか。ロランにとって、あの老ゴットフリートのように、美しい音楽はどこにでも存在するのである、ただ真正の聞く耳さえ持てば。

ロランは、「コラ・ブルニョン」の第5章ブレットの中で、「美とは、その場所にあってもっとも美しいもののことだ」と家具職コラ・ブルニョンに言わせている。

美しい家具は据えつけるべき家や部屋にもっともマッチしたものでなければ美しくない。それゆえ、コラ・ブルニョンは注文をうけた戸棚と大食器台のために、その据えつけるべき場所を自分の眼でたしかめに、片道に1日の行程を要する遠きをものともせず出かけていくのである。美は適合である。本来置かれるべき場所との調和である。ミレーは、画と額縁との調和についてさえ心を用い、画を額縁に入れてから後に筆を加えることがよくあったと言われるが、これほど適合ということを重視する点において、私はあの厳正な構図を追い求めたセザンヌを思い出し、その本質における類似を考えないわけにはいかないのである。

3. 表現のあるところに制作がある

ミレーは、自分の描く画がなにを表現しているか、を常に大切なことと考えていた。「何も語らないものを幾つ描いても、それは何かを制作したことになりません。……表現のあるところにのみ制作があるのです」何かを語ること、何かを伝えること、何かを人々におくること。自分の画を通して、人々をはげまし、慰め、高めること。そのために何を表現しているか、表現は成功しているか、これがミレーにとっての重要な関心事であったのである。「美術においては一つの主要な思想をもち、それを能弁に表現し、それを固く持ち続け、それをあたかもメダルの鑄型を使うように強く他人へ伝えなければなりません。」

すなわち、美術の目的は形でなく表現であると言うのである。画家にとって、正確な描写力をもつこと、独創的な構成力をもつこと、鋭敏繊細な色彩感覚をみかくこと、それらはもとより大切なことである。高い技術がなければみずからの思想的確に表現することはできないのだから。しかし、それがすべてではない。いかに、正確無比な技術をもって「何も語らない」ものを幾つ描いても、それは真の意味での創作にはなり得ない。創造とは意味をもつものでなければならぬ。人に語り、人を動かし、人に与えていくものでなければならぬ。それだからこそ、ミレーの描く「種まく人」は、ぎこちない姿であろうと少しもかまわないのである。その色彩が暗すぎようと平気である。ただ、その画面が語りさえすれば。そしてその画面は大いに語ったのである。1848年の革命後のパリの雰囲気巨人に巨大な波紋を投げ、さらに今日までの1世紀以上の長い間、神秘的な問いかけと烈しい精神的な行

動の力をもって、世界中の多くの人々に影響を与え続けているのである。

ロランにとっても、物を書くという仕事は、決して美しい文章を書くことでもなければ、怪妙な機智に富んだプロットで人を喜ばすといったことでもなかった。力強く語り、人を動かし、さらに高い人生へと駆りたてるもの、存在して価値のあるものでなければならなかった。たとえ、その文章が明晰さを欠くと言われ、表現が洗練されてないと言われようとも、そんなことはロランにとって重要なことではなかったのである。そしてロランの作品は多くを語り、世界中の数知れぬ多くの人々を慰め、勇気を与え、より高くより善い人生へとつき動かし、その感化影響を及ぼし続けているのである。ミレーとロランとは芸術に対する態度において全く同一の基盤に立っているのである。

4. 万物の中に普遍的なものを見る

ロランは、ミレーの画を理解するには宗教的な心情が必要である、と書いている。そして、ミレーの一風変わった苦行ぶりの中に、また彼が苦しみに対して感じた魅力の中に、キリスト教思想の力強い影響を認めている。ミレーの心に大きな影響を与えた熱心なキリスト教徒である祖母は、彼がパリへ旅立とうとした時こう言ったという。「わたしはお前が神様のご命令にそむいたり不実であったりするくらいなら、死んでくれたほうがいいと思うよ」またその後パリで自己の道を開拓しはじめた頃、祖母は再びこう注意したという。「フランソワ、お前は画描きである前にキリスト教徒であったことを忘れずにおいで。みだらなことに身を売ってはなりません。……永遠の生のためにお描き。それから審判を告げるラッパが今に鳴るかもしれないということを、お考え」このような宗教上の訓戒をたえず受け、宗教的な環境の中で彼は成育したのである。幼いときから祈禱書や教父たちの書物や聖書は彼にごく親しいものであった。自分の生活をたえず聖書に照し、聖書に結びつけていた。聖書の中から靈感を受けて多くの作品を描いたばかりでなく、農民の生活や風景を描いた画の中にも聖書の精神は呼吸しているのである。この呼吸している精神、これがミレーの画に多くの人をひきつける神秘的な魅力と奥行きを与えている。ロランはこのことを、ミレーは自分の作品に自分の魂を付け加えているといういいかたで書いている。ミレーは言う。「われわれはささいな事に崇高さを表現させる方法

を知らなければなりません。ここに真の力があるのです」「ああ、私は私の仕事を見る人に、夜の恐ろしさと美しさを見せたいと思います。大気の歌や沈黙やおののきを聞かせたいと思います。私は無限を眼に見えるものにしたいと思います……」無限を眼に見えるものにする。これこそは、彼の呼吸する聖書の精神であり、まさに創作——創造ということの意味なのである。「落穂拾い」から、また「羊飼いの少女」から、その他の多くの彼の作品から、なんとわれわれは崇高な靈氣を、無限の平安を受けとることであろうか。ミレーの画を汎神主義の画と名づけるのは、ある意味では当を得ているのである。すなわち、ミレーは、万物の中に普遍的なもの——神を見ていたのである。この点にこそ、ミレーの創作の秘密があると私は思う。どのような貧窮も生活上の苦しみもこれある故に、彼の魂を損うことはできなかったのである。むしろ苦しみは深ければ深いほど神の慰めは大きく、彼は出来上った画面にまず彼自身が慰めを受け、創作という無限を眼に見えるものにする価値ある仕事をなすとげたという充実感に喜びおどっていたのではないだろうか。

ロランもまた同じであったと思う。深くキリスト教思想の環境の中に成人したロランは、形式的教条的な宗教のいきかたをしりぞけたとはいえ、その精神においてきわめて真面目な、きわめて深い宗教的な人間であったとすることができるであろう。ロランは、有限な人間存在の根底に無限な神の存在をはっきりとその鋭い視力でとらえていたからである。われわれはロランの「内面の旅路」の諸篇で、ことに「闕」と「Tの王国」の中に、ロランがいかにして生の意味づけとしての神の存在をもとめて格闘しているか、そのすさまじいまでの姿を見ることができるのである。またキリスト神祕思想への深い傾倒のゆえに、容易に理解することができたインド思想への共感から生まれた「ヴィヴェーカナンダの生涯」「ラーマクリシュナの生涯」の中で、人間存在よりさらにはっきりと存在する神の現存について明確な文章を書いている。またロランの「三つの閃光」の一つであるスピノザ体験も結局のところ神との出会いの体験であったのである。「存在するいっさいのものは神の中に存在する」（「エチカ」第1部）自分もまた神の中に在る。万物は神の中に在る。そしてこれをひるがえせば、万物の中に神が在るのである。

5. 無用の美を排除すること

ミレーは、こう言っている「現代では美術は装飾物、客間のたしなみにすぎないものになっている。ところが過去の時代では中世紀までさかのぼってみても、美術は社会の円柱の1つ、社会の良心、社会の宗教感情の表現であった」。またあるときにはこう書いている「芸術は気晴らしではありません」と。ミレーが自分の画に対して持っていた覚悟というものは、きわめて厳格なものであった。ミレーが描く人物たちはみな労働をしている。乾草をすき返し、大地を耕し、羊を刈りこみ、手押車を押している。無用なもの、無意義なものがそこに描かれることはない。ミレーは、無用の美というものをきっぱりと排除するのである。ミレーにとって芸術は社会を支える円柱の1つでなければならなかった。それがなければ社会は崩壊してしまう、そのようなものとして芸術を考えていたのである。

ロランはどうだろうか。ロランが書きあらわす人物は、すべて、生きるために悩み、行動し、自分の良心に忠実であろうとして苦しみ、まどい、心酔し、歓喜している人たちである。無用なもの、無意義なものがそこに立ち交じることはない。ロランの生涯もまた、ミレーと同じように、人生の中で闘い続ける労働の生涯であったのである。ロランは著書「ミレー」の最後をしめくくるにあたって、「キリストにならいて」の中の言葉「くだらぬ事を斥けよ」(Relinque Curiosa)を引いている。われわれが地上生涯を終えて神の前に立ったとき、われわれが地上でどのような職業についていたか、富んでいたか、貧しかったか、あるいはどんな知識を積んだか、どんな議論をしたか、そのようなことを神からたずねられることはないだろう。たずねられることは、われわれが与えられた地上生涯において、与えられた時間をどのように過ごしたか、価値あること、永遠のためにどれだけ労したか、はたして真剣に闘ったか、ということであると私は思う。無用なもの、無意義なもの、むなしいことに心とらわれず、みずからが照された意義のあることがらに、生涯苦しみ労することが、最も貴重で大切なことであることを、この引用句によってロランは示そうとしたのだと私は思うのである。ミレーが死んだ1875年にロランはまだわずか9才であり、ロランとミレーとの出会いはただその作品を通してであるが、芸術の深いところで二人の魂はしっかりと結びあい、ロランはきわめて根源的にミレーを理解したのである。

ユニテの広場

「津高ロマン・ロラン友の会」と私

井土真杉

三重県津市にある津高校には、かつて約二十年間にわたって「津高ロマン・ロラン友の会」というサークルが、正式の文化クラブとして存在していた。その活動内容は、あるいは幼稚であり、またロランの名を冠するにはふさわしくない見当ちがいのものだったかも知れない。しかし、その間このサークルは、自由と平和を願う多くの若者たちに、つどう場を与え、励まし続けて来たことは確かである。昨年秋、津高校は旧制三重一中時代を含めて創立百年を迎えたが、その記念誌「あゝ母校」に「津高ロマン・ロラン友の会」の創設時のメンバーであった私は、以下の一文を寄せた。

*

疎開先の尾鷲で野球ばかりやって中学時代を送った私は、昭和25年春、晴れて津高の門をくぐった。当時はまだ戦禍のあとも生々しい旧津中のさびた鉄骨ののこり、西校舎、東校舎、その他に校舎が分散していた。私たち新一年生は、当然、本家の西校舎にはいれてもらえず、柳山と修成小学校に半分ずつ収容されることになる。

私は修成小学校の居候の一人であったが、立松哲二先生ほか、7人の先生方を中心に、すばらしい友人たちと共に、こじんまりと自由にすごしたここでの1年間は忘れがたい思い出にみちている。

15・6歳という、人の一生で最も感性のつよいこの時期に、多くの人はその方向を左右するような出来事に遭遇するものであるが、私にとっても、修成での津高1年が、そんなときであったといえそう。

一般社会「民主主義」の講座を受持った若き小出幸三先生は、さわやかな弁舌と

ユーモアで、少年たちに大いに人気があったが、しばしば、横道にそれるその講義のなかから、私は、戦争と平和、道徳、宗教、芸術、愛、死などといった人間のさまざまな問題について私なりに深く考えさせられるようになった。あまり本も読んでいなかった私が、芥川、トルストイ、太宰などを乱読したのも、先生の話に触発されたものであった。

そして私にとって最も大きな出来事は、先生からロマン・ロランの小説『ジャン・クリストフ』を紹介されたことだった。当時、ベートーヴェンに心酔していた私が、この音楽的な作品にひかれられないはずがない。この大河小説のなかには、人生にかかわるすべてが語られているようにおもえ、何回も読み、感動した。とりわけ、「どの国の人であれ、悩み闘っており、やがて勝つであろう自由な魂に捧ぐ」という巻頭の辞が私の心をとらえ、励ますのであった。このとき私は、すでに6年ほど前に死んでいたこのフランスの巨人を、人生の師と仰ぐようになったのである。

時代は悪化していた。25年の初夏には朝鮮戦争がおこり、戦火がふたたび若者たちの身近かなものとして迫ってくるようになった。

再軍備、レッドパージ、単独講和とすすむ日本の方向は、私たちに大きな不安をあたえずにはおこななかったが、この時代にこそ生涯を反戦平和のたたかいにささげたロマン・ロランへの共感ひろがり、津高にもロランは多くの読者を持っていたのである。

昭和27年1月末、(当時私は肋膜炎で休学中であったが)津高で「ロマン・ロランをしのぶつどい」という集会がもたれた。これについて、後年、小出先生はつぎのように書いておられる。

「このような暗い不安な空気の中かで、学校も、暗く不安なものを感じさせていました。校内で生徒が無屈で集まり、グループを持つことが不可能な状態になりました。(……)そういうときに津高内部にも自由と平和を心から求めている人々がいました。(……)堂々と集まり、平和と自由の空気を生み出そうではないか、というひそかな願いが出てきたことはわかっていただけでしょう。ロマン・ロランは自由と平和を真の意味で愛した人です。そしてロランは1月29日に生まれています。そこで、この日に集まりを持つということになりました。この案を実際に生み出した

のは、先ず竹田先生、そしてぼく、それから若林先生などでした」（32年刊津高
ロマン・ロラン友の会誌「ロランの友」より）この日、参加者は廊下にまであふれ、
平和を語り合い、「英雄交響曲」のレコードを聴いて感動を共にしたという。

このつどいの成功をもっとたしかな継続的なものになろうと、その年の新学期、
まことに風変りな文化クラブとして「津高ロマン・ロラン友の会」が正式に発足し
た。（世界各国に、ロランを崇敬する人たちのつどいがあり、わが国にも「日本ロ
マン・ロラン友の会」がすでにあった。津高の「友の会」も、精神は同じだが、組織
的には独立したものだ）

初代の顧問は小出先生。部長はなぜか私ということになっている。

さて、「友の会」この年の最大の行事は文化祭。ロランの戯曲『愛と死との戯れ』
を放送劇風にアレンジして部員が演じ、名大の真下信一教授を招いて講演を聞いた。

忘れもしない新館いちばん東端の図書室が会場だった。講演のあとの座談会で、
生意気な三年生の一人が、真下氏の旧帝大・一高教授という経歴に反発して
か、戦前から「官学」がはたしてきた支配層養成と戦争責任を迫及する質問をした。
これにたいして真下氏は、その責任を認めながらも、それがすべてではないと反論
され、「たとえば獄中でがんばった東大出の宮本顕治さんはどうですか？ 私はどうで
すか？」と逆襲されたのが印象にのこっている。

28年度は気宇壮大に中央公民館を借り、たしか竹田先生の肝煎りで、京大の桑
原武夫教授を招いての講演会。手書きのポスターを津の街にベタベタとはりめぐら
して歩いた甲斐あって、ほぼ満員の盛会だった。演題が意表をついて「島原の乱に
ついて」というのも桑原氏らしく、「ロラン読みのロラン知らず」という皮肉な名
句を吐かれたのを記憶している。

このほか、「友の会」は毎年7月14日に「パリ祭」を開き、フランス革命や、
文学などについて熟っぽく語り合ったものである。

こうして津高でロランに染まった私は、ロランをまねて？ 大学入試を一回失敗した
あと、念願の文学部仏文科にすすみ、ロランにさらにとっぷりと浸ることになる。

そして先輩風を吹かして、再三、津高を訪れ、昭和30年はロランの研究で有名
な名大の新村猛教授を招いての講演会、32年は京大の伊吹武彦教授、33年は現

ロマン・ロラン研究所長で当時大阪市大教授、宮本正清氏を招いての講演会の実現に一役買った。また32年以来恒例となった施設の子らを招いての「子供文化祭」を手伝ったりした。

こうした催しの記念写真が、たいてい私の手もとにのこっているが、その中には多くのなつかしい顔が見える。思えば「津高ロマン・ロラン友の会」は、すぐれた人士を輩出したものである。

日本作曲界の新進というよりは、すでに重鎮と呼ぶ方がふさわしい東京芸大の野田暉行（34年卒）。9年前、若冠30歳で三重県議に当選し、以来公害問題などで大活躍している萩原量吉（34年卒）。気鋭の憲法学者として囑望されている名古屋大学の森英樹（36年卒、在独）らも、「友の会」の出身である。津高3年の頃、坊主頭の野田君はすでに独学で室内楽曲などを作曲して、天才ぶりを発揮していたが、「音楽を生活の手段にしてはならない。音楽の世界で権威は認めぬ」などとヤンチャなことをいっていたのが、つい先日のことのように思い出される。

さて、マスコミの世界に就職してからは、仕事と、生活と、さまざまな活動にかまけて、すっかりロマン・ロランとは疎遠になっていた私だったが、51年、たまたまフランスを訪れる機会に恵まれた。そして宮本正清氏の紹介状をたずさえて、パリ、モンパルナスの由緒あるアパートにロラン夫人を訪ねた。夫人は80歳をこえてもいままなおかくしゃくとして、ぼう大なロランの資料の整理にあたっておられる。私は、日本の津という町にも、数多くのロランの友たちがいることを、たどたどしく伝えた。

翌日、ロランの墓に詣でた。酷暑の夏だった。ロランの墓はブルゴーニュの広大な黄金の麦畑のなかにひっそりとあった。照り輝く太陽のもと、汗まみれで墓の前に立った私は、全く予期しないことに、感動のあまり滂沱の涙が頬をつたうのを、どうすることもできなかった。25年という時間を越えて、津高の青春が、一瞬よみがえったように思えた。

ロランとの出会いは今から5年程前で、私が24才のころだった。それまでトルストイの著作を中心に読んできたのが、大体読めたので、今度はロマン・ロランにとりこんでみたいと思ったわけです。まず『ジャン・クリストフ』を2カ月もかかってやっと読み終えた。しばらくして『魅せられたる魂』を読み出した。判りにくい題の本だな、と思いながら何とか1カ月で読み終えた。

私は、『魅せられたる魂』を読み、アンネットが「苦しみを経て飲べへ」と強く生きていくのに感心させられ、何と強くてしたたかな女性だろうと思ったものである。一方、『ジャン・クリストフ』については、私の読書ノートに次のような文章が抜き書きしてある。

「ねえ坊や、お前が家の中で書くものは、みんな音楽じゃあない。家の中の音楽は、室内の太陽と同じだ。音楽は家の外にあるのだ。神様の爽やかな輝い空気を少しお前が呼吸する時にね。」

また、悩むクリストフに対し、

「そんなことは今度きりじゃないよ。人は望むとおりのことが出来るものではない。望むまた生きる、それは別々だ。くよくよするもんじゃない。肝心なことは、ねえ、望んだり、生きたりするのに倦まないことだ。その他のことは私たちの知ったことじゃない。……。」等々

1978年秋、新聞でロマン・ロランセミナーのことを知った。どんなセミナーだろうかと、恐る恐る出かけて行ったところ、宮本先生の静かな私宅での読書会的なセミナーに大変好感がもてた。あるセミナーで宮本先生が次のようなことを言われた。「私はガンジーの家の庭はきにも雇ってもらいに行こうかと真剣に考えたことがあるのですよ。」と。どうか先生が一日も早く健康を回復され、セミナーに参加していただくよう祈っています。

また私自身、セミナーに参加するとき、いつも準備不足なので、何とか最低2回読んでいくこと、1つ2つの質問を持って参加すること、を来年度の課題にしたいと思っています。

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算259回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1980年4月26日(土)

255回例会

第80回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 『コラ・ブルニョン』

発表者 全員が一言ずつ感想を述べる

出席者 14名

『ジャン・クリストフ』の甲冑を脱いで、ロランが自由になってゆく一つの契機であったといえる作品。フランス的な自由人の一典型といえる『コラ・ブルニョン』であるが、出席の若い男性はなじめない作品という感想であり、女性たちは結局はロランらしい、ロランそのものの分身に思える、という意見であった。

“人生の道の半ばをすぎ、或いはその坂道を七分までも登ってきた生活者たちにとっては、心を許せる友であらう”という宮本先生の解説が、いみじくも言いつくしているのではないだろうか。

5月24日(土)

256回例会

第81回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 『コラ・ブルニョン』から『ピエールとリュース』へ

発表者 特定せず

出席者 13名

自由への止むに止まれぬ欲求がコラの精神的活力であるが、作

者自身は登場人物を自ら生きながら調和的宇宙を直観し、作品自体のハーモニーを実現している。ロランはコラを書くことによって硬直した人々への批判精神を培い、自分の自由な精神を深く自覚して第一次大戦への心構えを固めたのである。

一方、まさに現代を舞台として時間を切断して濃縮した断面を示している『ピエールとリュース』は、人を愛することで戦争に抵抗する、短い愛によって永遠を築き上げた小説といえるだろう。ロランの作品の中ではいちばん短いが叙事詩的な広がりを持ち、愛、それこそが永続的なものである、と訴えかけてくる作品である。

6月28日(土)

第257回例会

第82回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 『クレランボー』第1部

発表者 大橋哲夫

出席者 13名

第一次世界大戦の発端から歴史的に説きおこし、世界地図まで描いて時代背景を明確にした上で、人類愛の詩を書く詩人であったクレランボーが戦争に巻きこまれ、息子マクシムの戦死によってその熱狂から醒めてゆく過程を、非常によくまとめて話され、発表者のクレランボーへの並々ならぬ打ちこみぶりがわかった。マクシムの死から目をそらさずに生きてゆくことがクレランボーの思想の転換の軸になってゆくのだが、更に続けての大橋氏の発表に期待したい。

9月27日(土)

258回例会

第83回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: 『クレランボー』第2部

発表者 大橋哲夫

出席者 7名

行動を決意したクレランボーが、具体的な行動の前に、文学界、大学方面、中産知識層などの友人たちを歴訪するこの第2部では、戦争の熱狂に捉われている社会状況が明らかにされ、戦争は人間の本能で避けることのできないものなのか、という点に議論が集中した。アカデミー会員ペロタンとの会話から、クレランボーの真摯な人生態度が浮き彫りにされ、ロランの生き方との類似を指摘する意見も出て、有意義な会合であった。

11月1日(土)(10月の例会が少しずれました)

259回例会

第84回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: 『クレランボー』第3部

発表者 岡田淳平

出席者 10名

第1部でのオプチミストのクレランボーが、何故、第3部で急激に変わるのか、理解しにくい、という疑問を提出されながらも、発表者は戦争に導いた祖国愛と訣別したいと考えるクレランボーが、戦争進行中の社会から浮いた存在になっていく——万人に反対する一人として——過程をよくまとめて話された。

あ と が き

数年前、筆者が本誌の編集の任に加えられたとき、ロランの著作の一読者としての立場から、いくつかの企ての夢を持った。その殆んどは、事情により実行はできなかったが、『ユニテ』の内容については、少くとも次のようにありたいと願った。①単に《ロラン体験》の発表誌に留まらないで、さらに深くロランの世界へ関心を誘うもの②同好会の機関誌的な垣根をこえ、現在と未来の社会へ広がりをもつもの③ロランの捉え方が、特定の角度あるいは好みに偏らないもの④テキストあるいは参考資料として、一読のあとも繰返し有用なもの、等であった。

このような考えから、編集者は重ねて山口先生に《ロラン体験の発展》を懇請した。先生は現在もなお変ることなく《ロランのための行為》とロラン研究の発展とに取りくみながら、しかも、それを《アンチアパルトヘイト活動》等へと展開させておられる。筆者もまた、かねてより《ロラン読みのロラン知らず》を自己の問題としても憂えてきたので、(自身は、毎日、エコノミックアニマルの生活をつづけているために、なおのこと)先生の中に、ロラン的に人間としての根源的在り方を問われている、珍しい例をみたからである。

わたしたちはかつて『戦いを超えて』巻頭の《ハウプトマンへの公開状》を読んだときの強い印象を今も忘れることができない。《公開状》は、ハウプトマンの、今回併載の《嘘言を駁す》に対して書かれ、さらにハウプトマンが《ロランに答え》たのであった。論争は、《文明》と《文化》の問題をも含み、このたびハウプトマン側の声が紹介されて初めて、わたしたちに、より正しく、より深く、理解できるものとなった。南大路先生からのお便りには、《ハウプトマンを読んでいますと、大東亜戦争を思い出します。ひと事ではありません。一つの教訓です》とある。先生の『ユニテ』へのご支援は、常にかかわらず、純粹で、暖かく、受けて仕事できる編集部の誇りは大きい。

大橋さんもまた、要請を入れ、《ミレー》をお寄せ下さった。氏は、月例セミナーの中心的存在となって久しいが、今回は、ロランのミレーを宗教者としての視点から捉えなおされた。本誌とともにながく記憶されることだろう。

《広場》の井土さんは、昭和二桁最初の生まれ、放送局に勤務されている。筆者とは同年令らしく、一読、あい呼応しあうものがあった。編集部は、文をお寄せくださった井土さんのご好意を心からうれしく思う。(また、井土さんが発表された記念誌には、担任の先生から借りていた『ジャン・クリストフ』の第1巻を読み終え、続きが読みたくて、夜の11時半に師宅を訪ねた同窓生の話があった。高校3年の息子を持つ、幸せな母親が、不遇であった自分の高校時代を回顧しつつ、一方では思いを、日常の出来事から、世界の問題へと馳せ、過去と現在とを照応させている。美しい文章と確かな思想。ここにも、ロランの種子をみつけ、思わないところで発芽を発見したときの、あのよろこびに似た感情を味わった。)

森さんは、大学で法律を専攻、現在司法関係の職業にある。セミナーでお会いしたときは、いつも控えめで静か。これからも、多く語って聞かせてくださるように。

*

世界の保守化が指摘されて月日がたつ。その特質と原因、行く先も論じられている。そこでいま、日本の社会をみると、私生活中心の現状肯定から保身性へと傾斜を強める中で、政・財・官界は、言うに及ばず、教育・医療・防衛等の分野においても、正気とは考えられないような出来事が続発している。すでに、《人権だとか、ヒューマニズムだとか理想論をいうのは、出世しないサラリーマンと同じだという考えは、もはや政府およびわが国民過半数の思想になっている》(サトウ・サンペイ)のだと。そしてこの保守化は、日本人の新しい状況への適応能力とも深く関わっていて、これは《振り運動の一時期を示すのではなく、ゆるやかに、しかし止めどなく滑り落ちる一時期を示す》(加藤周一)のだとも。さらに《現在の保守化がそのまま定着すれば、(もっとも懸念される「軍事大国」への道は、なんとか阻止できた場合でもなお)「管理社会」の成熟度においては、日本が世界一という不幸なことになりかねない》(山口 定)とさえいわれている。またある歴史学者は、先進科学技術を自負している日本の繁栄も、ヨーロッパの約一世紀、アメリカの約半世紀から、さらに周期が、短くなって、早晚、繁栄の終りがくるであろうと予測する。……

さて人間の解放こそは、今も昔とかわらない急務である。ロランは、前世紀末から今

世紀の初めにかけて、閉塞し、墮落した西欧社会の中で、人々の疲弊した精神から、魂の解放をめざした。また、はるかに厳しい条件のもとで、魯迅も独白する。——大勢の人間が、窓のない鉄の部屋の中で熟睡している。まもなく窒息して死んでしまうだろう。が、昏睡から死へ移行するのだから、苦しみはない。かえって起して臨終の苦しみを与えたものか？《数人が起きれば鉄の部屋をこわす希望が絶対はないとはいえない。》希望は将来にあるものだから、絶対はないという私の証明をもって、有り得るといふ彼の説を論破することは不可能だ。そこで私は文章を書いて行動することにしたのだ。——と。

とまれ、すべてが《無責任化》し、そして《管理化》されつつある、この日本の中でこそ、窓を開いて、光と新鮮な大気を取り入れよう。そうして、立場と時代とを越えた一つの声に鼓舞されて、市民として国民として、新しい出発をしたいと思う。

《過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことである》（ローマ法王ヨハネ・パウロ二世）

編集部 織田和夫



笹本 駿二

ローザ・ルクセンブルクは早くからロマン・ロランを深く尊敬していた。ローザの年下の友ハンス・ディフェンバッハもローザよりはおそく『ジャン・クリストフ』を読んでたいへん感激していた。さきに紹介した“レマン湖風景”を懐かしむ手紙から5ヶ月あと、ハンスに宛てた便りの中でローザはつぎのように書いている。

ロマン・ロランは私には未知の人ではありません。ヘンスヒェンよ。たしかに彼は、戦争中でもネアンデルタール時代の心理への逆戻りに与しなかつた。内外稀にみる人の一人です。私は彼の『パリのジャン・クリストフ』をドイツ語訳で読みました。あなたのお気を損じるおそれがありますが、いつものとおり正直に申し上げます。この本はたいへん立派で、共感できる作品だとは思いますが、しかし長編小説というよりはむしろ文明批評書で、本来の芸術作品ではありません。この点では、私はえらく敏感で、どんなにすぐれた傾向性も、私からみれば、神のような純粹の天才性に代わることはできません。けれども私は彼の作品をもっとたくさん読んでみたいと思います、ことにフランス語で。そのこと自体が私には一つの楽しみになるでしょう。そしてあの本よりもほかの本の中に、おそらくより多くのものが見出されるでしょう。(1917年8月27日プレスラウ)

ここに紹介したローザの言葉は、彼女がロマン・ロランを、戦争勃発にあたって理性を守り抜いた稀有の人物として尊敬していること、『ジャン・クリストフ』には文芸作品として以外の価値を認めていることを物語っており、いかにもローザらしいユニークなロラン観を伝えている。

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切日は特にもうけてはおりません。年2回発行を原則としておりますので、随時お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」 編 集 部

ユニテ 第3期 第12号

発行日 1980年10月31日
発行所 財団法人 ロマンロラン研究所
京都市左京区銀閣寺前町32
TEL(075)771-3281
印刷所 昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点

- /RR/2/1/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 1.
Choix de Lettres à Malwida Von Meysenbur. -Établi par Marie Rolland. (Albin Michel, Paris, 1945)
- /RR/2/2/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 2.
Correspondance entre Louis Gillet et Romain Rolland
-Choix de Lettres-. (Albin Michel, Paris, 1949)
- /RR/2/3-1/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 3.
Richard Strauss et Romain Rolland. -Correspondance Fragments
de Journal. (Albin Michel, Paris, 1951)
- /RR/2/3-2/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 3.
Richard Strauss et Romain Rolland. -Correspondance Fragments
de Journal. (Albin Michel, Paris, 1951)
- /RR/2/4/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 4.
Le Cloître de la Rue d'Ulm. -Journal de Romain Rolland à
l'École Normale (1886-1889), suivie de Quelques lettres à
sa mère et de Credo Quia Verum- (Albin Michel, Paris, 1952)
- /RR/2/5/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 5.
Cette Ame Ardente... -Choix de Lettres de André Suarès à
Romain Rolland (1887-1891).- (Albin Michel, Paris, 1954)
- /RR/2/6/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 6.
Printemps Romain. -Choix de Lettres de Romain Rolland à
sa mère (1889-1890)- (Albin Michel, Paris, 1954)
- /RR/2/7/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 7.
Une Amitié Française -Correspondance entre Charles Péguy
et Romain Rolland- (Albin Michel, Paris, 1955)
- /RR/2/8/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 8.
Retour au Palais Farnèse -Choix de Lettres de R. Rolland à
sa mère (1890-1891)- (Albin Michel, Paris, 1956)
- /RR/2/9/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 9.
De la Décadence de la Peinture Italienne. (Albin Michel,
Paris, 1957)
- /RR/2/10/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 10.
Chère Sofia. -Choix de Lettres de Romain Rolland à Sofia
Bertolini Guerrieri-Gonzaga (1901-1908)- (Albin Michel,
Paris, 1959)
- /RR/2/11/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 11.
Chère Sofia. -Choix de Lettres de Romain Rolland à Sofia
Bertolini Guerrieri-Gonzaga (1909-1932)- (Albin Michel,
Paris, 1960)
- /RR/2/12/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 12.
Sabine et Lucie Favore et Romain Rolland. -Lettres et autres
écrites- (Albin Michel, Paris, 1961)
- /RR/2/13/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 13.
Ces Jours lointains, Alphonse Séché et Romain Rolland.
(Albin Michel, Paris, 1962)
- /RR/2/14/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 14.
Fradlein Elsa. -Lettres de Romain Rolland à Elsa Wolff.-
(Albin Michel, Paris, 1964)
- /RR/2/15/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 15.
Deux Hommes se Revoient. -Correspondance entre Jean-Richard
Bloch et Romain Rolland (1910-1919)- (Albin Michel, Paris,
1964)

- /RR/2/15/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 16.
Romain Rolland et le Mouvement Florentin de la Voce.
(Albin Michel, Paris, 1966)
- /RR/2/17/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 17.
Un Beau Visage à Tous sens. -Choix de Lettres de Romain R
Rolland (1886-1944) -(Albin Michel, Paris, 1967)
- /RR/2/18/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 18.
Salut et Fraternité. -Alain et Romain Rolland- (Albin
Michel, Paris, 1969)
- /RR/2/19-1/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 19.
Gandhi et Romain Rolland. -Correspondance, extraits du
Journal et Textes Divers- (Albin Michel, Paris, 1969)
- /RR/2/19-2/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 19. Gandhi et
Romain Rolland. (éd. Albin Michel, Paris, 1969)
- /RR/2/20/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 20.
Je Commence à Devenir Dangereux. -Choix de Lettres de Romain
Rolland à sa mère. (Albin Michel, Paris, 1971)
- /RR/2/21/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 21.
D'une Rive à l'Autre. -Hermann Hesse et Romain Rolland, Cor-
respondance et fragments du Journal. (Albin Michel, Paris,
1976)
- /RR/2/22/ Rolland, Romain: Cahiers Romain Rolland, 22. Pour
l'Honneur de l'Esprit. (éd. Albin Michel, Paris, 1973)

* * * * *

SHIMURA BUNKO:

- /RR/3/1/ Rolland, Romain: La Vie de Michel-Ange. (Librairie Hachette,
Paris, 1925)
- /RR/3/2/ Rolland, Romain: Millet. (Duckworth and Co., London, 1920)
- /RR/3/3/ Rolland, Romain: Le Théâtre du Peuple. -Essai
d'Esthétique d'un Théâtre Nouveau- (Librairie Hachette
et Cie, Paris, 1913)
- /RR/3/4/ Rolland, Romain: La Montessan. (Ed. de la Revue d'Art
Dramatique et Musical, Paris, 1904)
- /RR/3/5/ Rolland, Romain: Le 14 Juillet. -Action Populaire en
Trois Actes- (Librairie Hachette et Cie, 1909)
- /RR/3/6/ Rolland, Romain: Histoire de l'Opéra en Europe avant
Lully et Scarlatti. (Ernest Thorin, Editeur, Paris.)
- /RR/3/7/ Rolland, Romain: Les Précurseurs. (Librairie Ollendorff,
Paris, 1923)
- /RR/3/8/ Rolland, Romain: Quinze Ans de Combat (1919-1934).
(Les Editions Rifer, Paris, 1935)
- /RR/3/9/ Rolland, Romain: Par la Révolution, la Paix. (Ed. Sociales
Internationales, Paris, 1935)
- /RR/3/10/ Rolland, Romain: Liluli. (Boni and Liveright, inc.,
New York, 1920)
- /RR/3/11/ D'Arco, Gian Renzo: Il Teatro Popolare in Francia. -Da
Cécile a Vilar- (Cavalli editore, Bologna, 1960)